

L
3
29

調查資料第三十二輯

生活狀態調查(其三) 江陵郡

朝鮮總督府

国立保健医学専門学校



10012068

調査資料第三十二輯

生活状態調査 (其三) 江陵郡

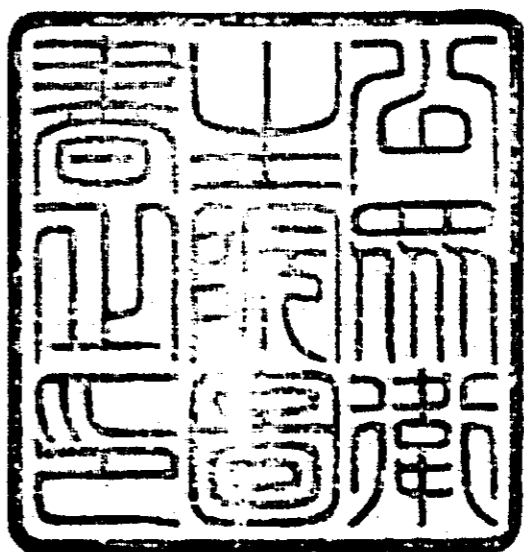
朝鮮總督府

昭和21年2月27日

川上理一氏

贈 衛生院 公 東 衛 生 院

L
3
29



序

本書は囑託善生永助をして行はしめたる生活状態調査の第三輯にして、表朝鮮とは諸種の事情を異にして居る嶺東地方の江陵郡に関する記録である。調査及び資料蒐集に就いて、江陵郡守、江陵警察署長、江陵公立農業學校長等が、尠からざる助力を與へられたことに對し、厚く謝意を表す。

昭和五年十一月二十日

朝鮮總督官房文書課長 萩原彦三

7941

調查資料
第三十二輯

生活狀態調查(其三) 江陵郡

目次

一、地誌	五
地勢・地質	五
氣候	六
名勝古蹟	八
土地	一〇
物産	三
戶口	二
交通	三
通信	四

目次

行政.....四一

二、經濟事情.....四五

農業.....四五

林業.....九三

水産.....九七

鑛業.....三三

工業.....三三

商業.....三三

租稅公課.....四一

金融機關.....五九

三、部落の現状.....一六三

部落の構成.....一六三

町洞里別戸口.....一八七

同族部落.....一九〇

模範部落.....一九六

部落の團結.....二一九

部落民の貧富.....二二六

四、生活様式.....二四一

住宅.....二四一

食物.....二四五

服裝.....二四七

燃料・燈火.....二五〇

冠婚喪祭.....二五一

五、文化・思想.....二六九

教育・知識	二六九
宗教・信仰	二七六
迷信・傳説	二七八
嗜好・習癖	二八三
娛樂	二八五
對人關係	二八八
選舉	二九〇
警察	二九一
衛生	二九六
六、家計狀態	三〇三
農家經濟調查	三〇三
農家收支表	三〇九



地圖

江・陵郡	二十萬分の一
江陵邑内及其附近	五萬分の一
注文津附近	同

寫眞

生活状態調査 (其三) 江陵郡

朝鮮總督府囑託 善 生 永 助

はしがき

江陵郡は、半島を表朝鮮と裏朝鮮とに區劃する脊梁山脈の東部に位置し、古來關東又は嶺東と呼ばれ、同じ江原道に在りても、嶺西地方とは、地勢・氣象・交通・産業等の状態を異にし、地理的條件に於て、自ら別天地を爲して居る。また歴史的には、古昔濊族の據つた地であり、後ち漢の武帝の治むる所となり、高句麗・新羅・高麗・李朝の各時代を通じ、江陵邑は嶺東地方に於ける行政の中心を爲し、夙に小京城とも稱せられ、儒學の隆盛を極めたる結果、この地方には兩班儒林の名門多く、從來他の地方との交通が頻繁でなかつた關係もあらうが、人情・信仰や特殊の風俗慣習等にして、今尙ほ昔ながらの姿を殘存し

はしがき

て居るものが尠くない。茲に於てか、生活状態調査の第三輯として、特にこの地方を擇んだ譯であることを先づ一言して置きたいと思ふ。

私と同行の都築肇氏が、命を受けて江陵地方に出張したのは、昭和四年十一月下旬から十二月中旬までであつた。私たちはこの間に於て、吉田郡守や、土地の事情に精通せる權寧機氏の案内の下に、各方面を視察するの便宜を得た。しかしながら、素より限りある僅少の日數を以て、各般の調査を行ふことは到底不可能であるから、大部分の調査を、郡當局及び警察當局に依頼することとし、私は同地滞在中、調査の方法及び項目などに就いて、充分懇談を遂げて歸任した。則ち本書載する所の資料の大部分は、斯くの如くして蒐集したもので、私は主として、これを整理編纂したに過ぎないのである。けれども若し本書中に不備の點や誤謬ありとせば、それは悉く、調査の方法を決定し、材料の取捨選擇に當つた、私の不行届の罪であることを斷つて置かねばならぬ。こゝに特記せねばならぬことは、この調査に就いて、江陵郡守吉田繼衛氏を始め郡當局、並に江陵警察署長木村盛之助氏を始め警察當局が、多大の助力を與へられたこと、江陵公立農業學校長原口良策氏以下職員生徒諸氏が、この種の調査上最も困難とする、鮮内最初の試みたる、農家經濟調査を完成して寄せられたことは、共に感謝の至りである。また寫眞の大部分は、同地の寫眞師秋本正男氏が、多大の苦心を拂つて撮影したるもので、その勞を多として居る。

顧みれば一年前、私たちが、積雪四尺に餘る旌善郡道巖面車項里に於て、自動車を乗り捨て、豫ねて用意の草鞋に足こしらへを充分にし、山又山の約三里半を、渴しては雪を嚙ちりつ、漸く大關嶺に辿りつき、落陽を浴びて海拔八百六十五米の峰に立つた時、地に曳くわが影の長きに先づ驚いたが、百千の白駒駈けるが如き嶺西の山々とは、全然趣きを異にした嶺東の翠巒が、恰も屏風に描いた繪のやうに脚下にひれ伏し、野を山を縫ふて、江陵を始め大小の聚落點々と散在し、一群の鶴渡りゆく彼方遙かに、日本海を望見した剎那、大自然の崇高さに、實に何とも名狀し難い感激の湧いたのを覺える。爾來十數日、更に親しくこれ等の土地を踏査し、また多くの官民諸氏に接するに及び、この地方に對する愛慕の念は益々募つていつたが、月日は早くも流れて一箇年を経過し、今茲に本書を纏め上げたる私は、恰も嘗て雪の大關嶺に立ちて前方を俯瞰した時のやうな憧憬を禁じ得ない。冀くは大方の熱誠ある援助によりて成りたる本書が、文化的にも經濟的にも特色多き、嶺東の雄郡江陵地方を世に紹介する上に於て、單なる一個の鳥瞰圖に終る如きこと無ければ、われ等の願は則ち足る。

一、地誌

地勢・地質

江陵郡は朝鮮半島の中央部に位する江原道の東南部にありて、東經自一二八・三一
至一二九・〇一 北緯自三八・〇四
に位
置して居る。東は日本海に面し、西は旌善・平昌兩郡に、南は三陟郡に、北は襄陽郡に接し、東西七里、
南北十五里、廣袤七十三方里餘に及ぶ。鮮内樞要地との距離を見るに、

釜山へ 八五里 元山へ 六五里 浦項へ 五二里 京城へ 七〇里 原州へ 四〇里 春川へ 五四里

あり、西部郡界には金剛山系に屬する門時の餘脈起伏するを以て地勢一般に高く、西部より海に向ひて急
傾斜を爲し、平地は全面積の三分の一に當る。郡内の山岳としては春梁山脈に屬する大山高峰多きも、就
中、邑内に近き八六五米の大關嶺は、京城・春川・横城・原州方面の通路にあたりて聳え立ち、旌善郡と
の郡界を爲して居る。春梁山脈以西は冬期積雪深く、殊に大關嶺附近に於て一層甚だしきを以て、交通杜
絶の不便を蒙ることが極めて多い。

海岸線は屈曲乏しく、僅に注文津・墨湖津・見召津あるの外、良港好津を有せず、河川もまた大流なく

總て水源を郡内に發したるものにして、南大川・新里川・連谷川・殊樹川・安仁川・剡石川・部丁川等がある。川幅は十間乃至三十間にして、その最大なる南大川は延長七里餘に及んで居る。河流は大概緩かにして、流域には平野を有し、土地一般に肥沃である。

郡内の地層は、殆んど第四紀新層より成り、臺岩は片麻岩にして、北部に僅か花崗岩あり、南部の一部のみ第三紀層より成る。地質は一帶に砂質壤土であるが、海岸に沿ひたる地方は沖積土に粘土を交へて居る。

氣候

半島の中央を縦斷する脊梁山脈は、東海岸に急迫して郡界を扼し、自然の風障をなし、爲めに季節風を受くること少く、且つ日本海の影響を受けて氣候溫和である。夏季は攝氏三〇度を最高とし、冬季は零下五度を最低とす。天候は四時概して良好なるも、晩秋より初春に互り強風あるを常とする。

氣象表

溫度	月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
平均		3.1	5.0	8.2	10.6	14.7	21.6	26.9	26.4	22.3	13.8	7.6	3.2	12.2

氣溫	最高	最低	降水	蒸發	季節	風		快晴	曇	降	雪	暴風	霜
						平均速度	最大速度						
	18.4	14.8	111.4	31.4	3.0	南	2.2	10.1	9	3	4	6	1
	14.8	11.1	81.1	21.1	2.0	南	1.9	7.0	8	4	7	7	3
	12.2	8.5	51.5	16.5	1.0	南	1.6	4.5	10	9	7	7	2
	10.0	6.3	31.3	11.3	0.5	南	1.3	2.8	18	14	1	1	1
	8.0	4.7	21.7	8.7	0.2	南	1.1	1.9	26	21	1	1	1
	6.4	3.1	16.1	6.1	0.1	南	0.9	1.3	34	28	1	1	1
	5.0	1.7	10.7	4.7	0.0	南	0.7	0.9	42	36	1	1	1
	3.4	0.1	6.1	3.1	0.0	南	0.5	0.7	50	44	1	1	1
	2.0	-1.3	2.3	1.3	0.0	南	0.3	0.5	58	52	1	1	1
	0.4	-2.9	-2.9	-1.9	0.0	南	0.1	0.3	66	60	1	1	1
	-1.2	-4.5	-4.5	-3.5	0.0	南	0.1	0.1	74	68	1	1	1
	-2.8	-6.1	-6.1	-5.1	0.0	南	0.1	0.1	82	76	1	1	1
	-4.4	-7.7	-7.7	-6.7	0.0	南	0.1	0.1	90	84	1	1	1
	-6.0	-9.3	-9.3	-8.3	0.0	南	0.1	0.1	98	92	1	1	1
	-7.6	-10.9	-10.9	-9.9	0.0	南	0.1	0.1	106	100	1	1	1
	-9.2	-12.5	-12.5	-11.5	0.0	南	0.1	0.1	114	108	1	1	1
	-10.8	-14.1	-14.1	-13.1	0.0	南	0.1	0.1	122	116	1	1	1
	-12.4	-15.7	-15.7	-14.7	0.0	南	0.1	0.1	130	124	1	1	1
	-14.0	-17.3	-17.3	-16.3	0.0	南	0.1	0.1	138	132	1	1	1
	-15.6	-18.9	-18.9	-17.9	0.0	南	0.1	0.1	146	140	1	1	1
	-17.2	-20.5	-20.5	-19.5	0.0	南	0.1	0.1	154	148	1	1	1

備考 降水量、蒸發量の單位は耗にして、一耗は一坪に付一升八合三勺に當る。氣温は攝氏の度、(一)印は氷點以下を示す。風の速度は一秒間米、天候日數中降水は雨、雪、雹、霜〇・一耗以上ありたる日、雪及び霜は現象ありたる日、暴風は風速度一〇米以上の日なり。快晴は曇量の日平均二以下、曇は同八以上。

名勝古蹟

鏡浦臺

邑内の北一里甌山の下、江門津の湖を鏡浦と呼ぶ。周圍三里餘に及び、海水相通じ、湖色清澄新磨の鏡の如く、よつて此の名がある。湖の東岸は白沙連り、海水は湖汀を洗ひ、湖岸の老松の間には人家隠見して、月影湖上に映じ、關東隨一の名勝である。今を去る五百餘年前、江陵府使李明俊、始めて亭を湖上に初げ、その後三百二十餘年前、江陵府使韓汲は、更にその亭を現在地に移し、これを鏡浦臺と呼ぶ。肅宗大王は太くその風光を愛し、親書の額を掲げて讚せられた。

烏竹軒

邑内より北に一里、丁洞面竹軒里に在り、名賢申命和の自第にして、今を去る三百年前、大儒李文成公珥(號栗谷)誕生の亭である。後ちその門人權處均なるものが此處に箕居し、その居を烏竹軒と號す。庭前に烏竹のある故である。今尚は李文成公の著したる「蒙叢要訣」及び手書草本並に愛用の硯石等を藏する。

海雲亭

往昔判書沈彦光の初亭せるもので、鏡浦の西にあり、鏡浦の勝景を一眸に收めると共に、冥々たる滄海

を外に圍らし、風光頗る絶佳である。

普賢寺

城山面普光里にあり、二千六十餘年前の古刹にして、當時地藏禪院と稱し、その後千三百年前に至り普賢寺と改稱す。釋証に據ると、文殊普賢の石舟に乘じ海を越へて來り、此の地を相して建立せるものである。寺前に古碑あり、新羅の僧朗圓大師悟眞の塔碑であるが、朗圓は唐の太中八年に生れ、年二十四で始めて出家し、聖僧の名ありし人である。

畿國古城

今を去る千五百餘年前、畿の土築せし城壁にして、邑の東端にあり、その周圍三千四百八十四尺なりしと言ふも、今は僅にその基址を存せるのみである。

江門島

邑内より東北一里二十町を距る江門津里海岸に突出して居り、南約三十五町を距る堅造島(見召津)と對立して、日月出の捍門を爲し、關東八景の首位にある鏡浦臺の御製案山にして、且つ鏡浦水口の獨峰なるを以て、屢々詩人の吟詠に上り有名である。

龍池

邑東十町距る現玉川町（世傳秘國古城外）にあり、その周圍三十五尺に及び、柳樹涯岸に區し、水深境清にして、盛時遊覽の所である。高麗駙馬崔文漢、松京より駿馬に乗り江陵に至り、獨り池の邊へ往き、馬を刷り柳に係けた處、その馬池の中に入り、龍身に變じ天に上つたとの傳説あり、名けて龍池と曰ふ。

土地

官公私有別面積（昭和四年末現在）

官有	公有	私				合計
		内地人	朝鮮人	外國人	合計	
三、六九〇・〇	九、三三三・五	一、〇〇八・八	三、八一三・一	六	一四、一三三・〇	
備考	本表には林野面積を含まず					
國有民有別面積						
區別	田	畑	池	沼	雜種地	合計
國有	一、一五三・五	二、三七四・反	三・八	二・反	一・反	三、五五六・反
民有	六、三五九・三	六、九七八・六	五、一六五	一・三	一・八八	一三、八七四・五
合計	六、四七四・五	七、一六〇	五、二〇三	一・五	一・八八	一四、一三三・一

耕地面積

六四七四・五

七、一六〇

一

一

一四、一三三・一

土地賣買價格（昭和四年）

種別	上等地			中等地			下等地		
	價格	地價	地稅	價格	地價	地稅	價格	地價	地稅
田	二四〇	三三〇	五六	一三〇	一五〇	二五	六五	七〇	一一
中	一五〇	二七〇	四五	七五	八〇	一四	四五	一〇〇	〇二
下	九〇	二一〇	三五	六〇	三〇	〇四	三三	三〇	〇一
畑	三〇〇	六六〇	一一二	二〇〇	四五〇	七六	九〇	一六〇	二八
中	二二〇	五五〇	九六	一一〇	三三〇	五六	六〇	五〇〇	〇九
下	一二〇	五一〇	八六	七五	二二〇	三八	三〇	一〇〇	〇二
池	三〇〇	九〇〇	一六一	一〇〇	四〇〇	六八	二〇	一〇〇	一七
中	二〇〇	八〇〇	一四四	六〇	二〇〇	三四	一五	八〇〇	一三
下	一〇〇	五〇〇	一〇二	三〇	一五〇	二五	一〇	四〇〇	〇六
土地賃貸價格（昭和四年）									
田	二四	三三	五六	一三	一五	二五	六	七〇〇	一一
中	一五	二七	四五	七	八	一四	四	一〇〇	〇二
下	九	二一	三五	六	三	〇五	三	三〇	〇一

一、地

二

生活状態調査

物産	壺			番			計
	下	中	上	下	中	上	
	一〇	二〇	三〇	一一	二二	三〇	一〇六
	五〇	八〇	九〇	五一	五五	六六	二〇二
	一〇二	一四四	一六一	八六	九六	一二二	四〇五
	三〇	六	一〇	七	一二	二〇	七六
	一五	二〇	四〇	二二	三三	四五	一六〇
	二五	三四	六八	三八	五六	七六	二〇九
	一	一	二	三	六	九	一〇〇
	四〇〇	八〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	五〇〇	五〇〇	二〇〇〇
	〇六	一三	一七	〇二	〇九	二八	二〇六

江陵郡は嶺東に位置し、氣候の温暖な地方で、東に海を控へ、土地肥沃にして農耕に適し、従つて古來より産物が極めて豊富である。

拙者「朝鮮の物産」(調査資料)は、李朝初期、中期、末期、併合後の物産を掲げてあるが、試みに李朝初期の物産につき、「新增東國輿地勝覽」の江陵大都護府の條を見ると、

- 芋・弓幹桑出羽 添縣・竹箭出府北飯山及 府東北江門島・海松子・五味子・紫檀香・黄楊・紫草・松茸・人蔘・地黄・茯苓
- 蜂蜜・白花蛇・海獺・鹽・荑・細毛・海衣・海蔘・鮫・紅蛤・文魚・麻魚・魴魚・廣魚・赤魚・古刀
- 魚・大口魚・黄魚・鱧魚・松魚・銀口魚・訥魚・余項魚・蓴・回細蛤

となつて居り、今より約四百年前の物産の種類が略ぼ明らかである。降つて今より百五十年より、二百年前李朝中期の江陵の物産に就いては「攷事新書」に左の記述がある。即ち

- 芋・弓幹木・箭竹・海松子・五味子・紫檀香・黄楊・紫草・松茸・人蔘・地黄・茯苓・蜜・蓴・石鍾乳・何首烏・白花蛇・海獺・銀口魚・訥魚・枳實・海物

を算し、更に降つて今より約五十年前の李太王時代に編纂された「江陵邑誌」の物産を見ると、

山産

- 人蔘出五 釜山・海松子出連谷面 臨溪面等・松茸出嶺西 各面・地黄出嶺東 各面・茯苓出山 底面・川椒出連谷面 羽溪等面・木防己出嶺東・蜂蜜出嶺西・當歸出嶺東・蔓蔘出五 釜山・山藥出嶺西・紫草出嶺西 各面・黄栢出嶺西・五味子出嶺西・紫檀香出嶺西

果實

- 梨出嶺東 西・大棗出嶺東・栗出嶺東・銀杏出嶺東・柿出嶺東・來禽出嶺西・木瓜出嶺東

水産

- 廣魚採秋・文魚採秋・紅蛤採秋・海蔘採秋・大口採秋・松魚採秋・鱧魚採秋・銀口魚採夏秋・早菴採冬

となつて居る。常時と今日とは多少物産の名稱も、種類も異なつて居るが、現今の物産の主なるものを掲げると次の通りである。

イ、動物

鳥類 — 牛・馬・豚・猫・豹・犬・狐・熊・獐・猪・栗鼠・兔

鳥類 — 鳩・黄道眉・鷹・鷲・雁・鴨・鴉・鵲・標鵲・鶴・鶉・鳩・雀・鶴・家鴨・ふくろ・きつね

ほととぎす・かつこうとり・鶯・ひばり

昆虫類 — いなご・きりぎりす・こぼろぎ・かまきり・もんしろ蝶・あけはの蝶・えだしやくとり・か

みきりむし・こかねむし・てんとうむし・こくぞうむし・ありまき・五倍子蜂・かひからむし・まこ

ばひ・蜜蜂・蟻・とんぼかげろう・松の髓虫・松の黒虫・松の心喰穿孔虫・柳の蠅

爬虫類 — てうせんわつみとり・やまか・し・まむし・とのさまかへる・あまかへる

魚介類 — 鯉・鮎・鰻・鮪・鯔・鱈・鱚・鰱・鯛・鮠・鱈・鱈・鱈・鱈・鱈・鱈・鱈

り・しじみ

ロ、植物

禾 本 科 草木類

おほむぎ屬・おほむぎ・「ライ」むぎ屬・「ライ」むぎ・こむぎ屬・こむぎ・かもじくさ屬・かもじく

すゞめのちやひき屬・すゞめのちやひき・いぬむぎ・すゞめのかたびら屬・たちいちこつなぎ・かせ



ぐさ屬・にはほこり・よし屬・よし・ちからぐさ屬・をいしほからすむぎ屬・からすむぎ・やまあは

屬やまあは・すゞめのでつぼう屬・すゞめのでつぼう・いね屬・いね・まこも屬・まこも・あは屬・

あは・えのこぐさ・すはあはびえ屬・いぬあは・きび・ひえ・めひじは・とたしは屬・とたしは・し

ば屬・しば・めかるかや屬・めかるかや・もうこし屬・もうこし・をかるかや・すゞき屬・かや(を

ばな)・ちがや屬・ちがや・じゆすたま屬・たうむき・たうもろこし屬・たうもろこし

藓 苔 類

卷 柏 科 いはひば屬・くらまこけ

木 賊 科 とくさ屬・すぎな・とくさ

薇 科 せんまい屬・せんまい

墓 白 科 うちしろ屬・うちじろ

石 章 科 のきしのふ屬・のきしのふ・わらび屬・わらび・しのふ屬・しのふ・やぶそてつ屬・や

ぶそてつ

すぎこけ科 すぎこけ屬・かたまりすぎこけ

せにこけ科 せにこけ屬・せにこけ

一、地 誌

木竹類

郡内一圓に産する森林樹木、竹類の中、幹の長さ約一丈以上に達するもの、地毛を形成せる主なる灌木類、及び移入樹種の主要なるものを列記すると左の通りである。(片假名にて記せるは移入種である)

科名	内地名	朝鮮名	漢字名
公孫樹科	いでてう	은성나무	銀杏木・白果
	いちちる	자나무	朱木・赤白松
	てうせんまつ	가 나무	栝・栝子木・紅松
	てうせんもみ	가 나무	杉松・榲木
松科	たうしらべ	물나무	白松・白大松
	かからまつ	낙엽송	落葉松
	あかまつ	송나무	松
	ねづみさし	노가지나무	老柯子・社松
	びやくしん	황가나무	柏檜香木・芥木
	くにまつ	해송	海松
	またまけ	쌍대송	苦竹
禾本科	はちたく	조대	淡竹
	こまたけ	오대	烏竹

科名	内地名	朝鮮名	漢字名
楡柳科	てうせんやまならし	사사나무	山竹
	とろやなぎ	당비물	唐楊柳
	ヒラミツトヤマナラシ	양비물	楊柳
	モニリツエラヤマナラシ	양비물	楊柳
	よぞやなぎ	개비물	杞柳
	こりやなぎ	고리비물	杞柳
	たにかはやなぎ	쌍비물	蒲柳
	こうらいしたれやなぎ	비물	垂柳
	こうらいやなぎ	비물	柳
	まくしろじりみ	가래나무	山桃
	てうちぐるみ	호도나무	胡桃
	はくのき	오리나무	五里木
	そのをれかんば	박달나무	檀木
こそれかんば	박달나무	檀木	
しらかんば	자작나무	梓木	
さばし	물박달나무	樺木	

豆科

あべまき
てうせんぐり

말참나무
참나무

西楸木

松科

こならほら
なかしほ

참나무
참나무

同楸木

桑科

けやしき
けやしき

느리나무
느리나무

楸木

梨科

いぬなし
かきなし

아광나무
아광나무

山査木

櫻桃科

まこしらあんず
あまざくら

개살구
살구

杏

豆科

さいかち
ニセアカシヤ

아시나무
아시나무

柎

芸香科

さんせう
かた

초피
초피

山柎

棟科

ちやんちん
てうせんいぬつけ

참나무
참나무

眞楸木

漆科

まき
からこきかへき

황자
황자

黄楸

衛茅科

てうせんやまのみ
てうせんばうちかへで

단풍나무
단풍나무

丹楓木

榿科

てうせんやまのみ
てうせんばうちかへで

단풍나무
단풍나무

丹楓木

一、地誌

一九

葡萄科	おにめじすり	계박달나무	
田麻科	てうせんやまぶたら ましうしなのき	피나무	皮木
五加科	あむしるしなのき たらのき	피나무	皮木
山茶英科	やまばらし みつ	드름나무 물개금나무	木頭菜 水棟木
臨陽科	てうせんやまつじ ほんつじ	럼	
柿科	まめがき てうせんれんげう	고양나무 신리화	君選子木 辛夷
木原科	てうせんねりこ やちだも	문푸레나무 문푸레나무	栲同
玄蓼科	きり	오동나무	栲
紫葳科	まささげ	개오동나무	
忍冬科	からたにうつぎ こうらいうつぎ	병암나무	

ハ、鑛物 (鑛物類及び土石類)

石炭・亜鉛・金・長石等を主とし、その産出地は玉溪面管内で、亜鉛、金は採取鑛區各一箇所とし、石炭は埋藏量少量にして採取鑛區なし。長石は未だ採掘せられず、その風化されしものが、多く山腹山麓に白粉を散布せるが如く見らるゝも、採集陶土とし利用さるゝは近き將來と觀察せられる。花崗岩・片麻岩・花崗岩は郡内北部に多く産し、片麻岩は郡内一圓に産する。而してこれが利用採取は、花崗岩にありては建築土工材に、片麻岩は温突用に供せられ、多く山腹山麓より採取せられる。

戸口

江陵郡は地勢の關係上、住民は西方山間部に粗にして、東方平坦部に密で、概して人口未だ稀薄たるを免れないが、行政各般の事項は年を逐ふて進展し、殊に衛生設備の進歩に伴ひ、漸次人口は増加しつゝ、あり、市街地及び村落は次第に發達して居る。

戸口増加表

大正八年	内地人	朝鮮人	支那人	合計
	戸数 人口	戸数 人口	戸数 人口	戸数 人口
	三三三 七五二	三三九一 六八、九七二	九 二六	三、四三三 六九七五二

生活状態調査

昭和四年	二八四	一、〇六六	一四、三七六	八、八五二	二六	八五	一四、六八五	八、〇三三
增加(十年間)	六一	三五五	二、二八五	二、八八〇	一一	五七	二、三六三	一、三二七

面別戸口表 (昭和四年末現在)

種別	戸数	内地人		朝鮮人		支那人		合計
		男	女	男	女	男	女	
江陵	一、三三	五、八七九	七、七〇	五、五〇〇	五、六六六	二、二六	二、三三	五、九三三
城山	三	八、四三三	一、三三〇	三、八七	三、六一	七、五〇八	一、三三〇	三、八七五
城山	三	四、八	八、八	二、七五	二、六七	五、三三	八、九七	二、七〇九
旺山	二	五、五	八、一、二五	三、八八	三、五七	七、七一	一、三三	三、八三七
邱井	一	一、二	一、二五	三、九〇	三、一六	六、四六	一、二	三、一九
江東	二	四、一	一、七	三、三三	三、五八	七、〇	一、二	三、五九
玉溪	九	三、三	一、七	四、〇	三、八〇	七、八〇	一、五	四、〇九
望洋	三	三、七	七、三	二、〇	一、九	三、九〇	七、三	二、〇〇
丁湖	一	二、三	七、六	二、七	二、三	四、〇	一、一	二、三〇
沙川	二	二、一	九、五	二、九	二、八	五、八	二、四	二、九
連谷	三	七、八	一、一八	三、七	三、〇	六、七	一、一	三、三

新里	計	一、三三	一、三三	一、三三	一、三三	一、三三	一、三三	一、三三
計	二、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三

内鮮外人別男女累年戸口數

年別	内地人	朝鮮人	支那人	合計	内地人		朝鮮人	支那人	合計
					男	女			
昭和元年末	二、六	一、三、五五	一、六	一、三、七九九	五、五	五、二	四、〇、二七	一、七	四、〇、九〇
昭和二年末	二、七	一、三、八三	一、七	一、四、一三	五、五	五、九	四、〇、三三	一、四	四、〇、九五〇
昭和三年末	二、八	一、四、〇五	一、七	一、四、三三	五、五	五、九	四、一、〇九	一、五	四、一、八三
昭和四年末	二、八	一、四、三六	二、六	一、四、六六	五、五	五、一	四、一、七三	一、六	四、一、三三

職業別戸口數 (昭和四年末現在)

區分	戸數	職業別戸口數		合計
		男	女	
農林牧畜	六	二、四	二、九	八、八
漁業及製鹽業	二、四	二、九	八、八	二、二
工業及鑛業	二、四	二、九	八、八	二、二
商業及交通業	二、四	二、九	八、八	二、二
公務及自由業	二、四	二、九	八、八	二、二
其他の有業者	二、四	二、九	八、八	二、二
無職業及職業を申告せざるもの	二、四	二、九	八、八	二、二
合計	二、四	二、九	八、八	二、二

一、地誌

二三

生活状態調査

人口

内地人	二七	一一一	一三五	三七二	四三二	三	六	一、〇八六
朝鮮人	六七、一四八	四、九八七	一、四六八	五、二四九	一、〇七一	一、八二三	一〇六八	一、八五二
支那人	一〇	一	一	七五	一	一	一	八五

結婚離婚數 (昭和四年中)

結婚	二七	一一一	一三五	三七二	四三二	三	六	一、〇八六
離婚	一〇	一	一	七五	一	一	一	八五

内地人	計	内地人	朝鮮人	支那人	計	内地人	朝鮮人	支那人	計
四	九〇五	一	九〇九	一	三〇	一	三〇	二〇九	一九、四〇九
備考	内地人の通婚者なし								三一九六二

現在朝鮮人結婚年齢別表 (昭和四年中)

妻の年齢	夫の年齢		合計
	未十七歳	十七歳以上	
十五歳未満	四	五	九
十五歳以上	三五	一四〇	一七五
二十歳未満	七四	二四三	三一七
二十歳以上	一三八	五四	二二二
二十五歳未満	五	一五	二〇
二十五歳以上	九	八	一七
三十歳未満	二	一	三
三十歳以上	二	一	三
三十五歳未満	一	一	二
三十五歳以上	一	一	二
四十歳未満	一	一	二
四十歳以上	一	一	二
五十歳未満	一	一	二
五十歳以上	一	一	二
六十歳未満	一	一	二
六十歳以上	一	一	二
合計	二九四	四九五	一、〇八六

種別	一月		二月		三月		四月		五月		六月		七月		八月		九月		十月		十一月		十二月		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
内地人	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
朝鮮人	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
支那人	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
合計	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	九〇五

種別	一月		二月		三月		四月		五月		六月		七月		八月		九月		十月		十一月		十二月		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
内地人	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
朝鮮人	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
支那人	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
合計	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	九〇五

